

## 学徒出陣五〇年、わだつみ像建立四〇周年のとりくみ

安 齋 育 郎

一九九三年は、太平洋戦争において日本の敗色が濃くなりつつあった戦況の中で「学徒出陣」が行われてからちょうど五〇年目にあたった。今日まで明らかにならなかったところでは、立命館からおおよそ三〇〇〇人に及ぶ学徒が戦場に赴き、学徒勤労動員に駆り出された約三〇〇〇人もども、多大の犠牲を余儀なくされた。戦後、「平和と民主主義」を教学理念に掲げてきた立命館大学は、痛恨の学徒出陣から半世紀を経た一九九三年、平和の創出を祈念して一連のとりくみを行った。

一月二六日～二月一六日には、国際平和ミュージアムに併設されている中野記念ホールにおいて、「戦争、大学そして学生―学徒出陣五〇年・わだつみ像建立四〇周年記念特別展」が開催された。本学所蔵の資料に加え、多くの校友や関係諸大学からの貴重な資料の提供を受けて、特別展は成功裡に開かれ、当初予想を上回る参観者を迎えた。

二月一日には、大南正瑛総長も呼びかけ人の一人となって、わが国の四年制私立大学の実に七〇%にあ

たる総長・学長が連名で「学徒出陣五〇年にあたって」の共同声明を発表した。平和の問題に関してこれほどの規模の大学の総長・学長が共同の意志表示を行ったのは空前のことであり、快挙といふべきものであった。一部の右翼的ジャーナリズムは、この共同声明を口汚く罵る論評を書いたが、それは、声明のもつ影響力が無視できないものだったことの証拠であるとも言える。

一二月七日には「アジア・太平洋学長フォーラム」が開かれ、立命館大学の南総長をはじめ、延世大学（韓国）・中国人民大学（中国）・フィリピン国立大学（フィリピン）・ハノイ工科大学（ベトナム）・ハワイ大学（アメリカ）からの学長または学長代理の参加を得て、「戦争の世紀であった二〇世紀」から「平和の世紀であるべき二一世紀」への転換点にあたって、平和の創生に向けて大学および大学人に何ができるかを真摯に討議した。南総長は、①それぞれの大学が何らかの「平和プロジェクト」を策定すること、②学長の相互訪問、教員・学生の交流などを通じて相互理解を深めるための「大学間交流プログラム」を検討すること、③平和教育に関する資料交換を行なうこと、④平和に関する共同研究を推進すること、⑤相互理解を妨げている要因の克服をめざすフォーラムなどを開催すること、の五項目を提言したが、アジア・太平洋の諸大学の学長もこれに賛意を表明した。

翌一二月八日には、国際平和ミュージアムエントランス・ホールの「わだつみ像」前で第四〇回不戦のつどいが開催された。主催は、立命館大学六者（教職員組合・一部学友会・二部学友会・院生協議会・生活協同組合・同労組）で、集会には南総長をはじめ各パートの代表者ら二五〇名が参加して不戦の誓いを新たにしたのに加え、折からアジア・太平洋学長フォーラムに出席した海外の学長らも献花を行なった。

同日夕刻には関連文化行事として「シネマ&トーク」が七〇〇名の参加を得て開かれ、映画「月光の夏」の上映に続いて、同映画監督の神山征二郎氏、俳優の花沢徳衛氏、本学の百年史編纂委員会顧問で、最近「学徒出陣―わだつみ世代からの伝言」を著した岩井忠熊名誉教授による「平和トーク」が、木津川計産業社会学部教授の司会で行われた。

そして、一連の企画のしめくくりとして、翌二月九日には、国際平和ミュージアムの主催による加藤周一館長（国際関係学部客員教授）の特別講演会「『学徒出陣』五〇年と日本の現状」が開催され、約二〇〇人の教職員・学生・市民が参加した。

これらの一連のとりくみは、大南正瑛・加藤周一編著『わだつみ不戦の誓い』（岩波ブックレット）としてまとめられ、在校生・新入生に配布されて平和教育に活用されることとなっている。まさに、「平和と民主主義」の教学理念の今日の実践と言えるであろう。

（立命館大学国際平和ミュージアム館長代理、国際関係学部教授）

※ 以下、学徒出陣五〇年に関するとりくみの記録を掲載する。